

生死の狭間を生きる

～細井夫妻の選択～

遠 藤 均

星槎道都大学研究紀要

経営学部

第2号

2021年

生死の狭間を生きる

～細井夫妻の選択～

遠藤 均

要約

深刻な病により極限状況に陥った細井夫婦の生き方とおし、ぎりぎりの境遇だからこそ芽吹く人間のすばらしい価値と可能性を見つめていく。

そして、私たちが、もしもそういう状況に直面したばあい、どのようにその限界状況に対処し、突破するかを、価値観という視点から模索する。

【序 過去という牢獄からの脱出】

想像していただきたい。

あなたは、不慮の事故で、片腕を失ってしまった。と。

そのとき、どちらの道（生き方）を選択するだろう？

ひとつは、失くした片腕にいつまでも固執する生き方。自分が不幸なのは、片腕がないせいであり、腕を取りもどしさえすれば幸せを取りもどせると考えて。

もうひとつは、いっぽうの腕があることに感謝し、ポジティブに生きる生き方。どんなに努力しても、とりもどすことができないことは、きっぱり忘れて。

はっきり言えることは……。

前者の生き方は、出口の見えない苦みの泥海（不幸）におのれを沈めてしまう。

たほう、後者の生き方は、あらたな幸福をつくりだす可能性にあふれているということ。というのも、幸・不幸とはみずからが生みだす想念であり、自分が不幸だと思えば不幸になり、幸福だと思えば幸福になるのだから。

こうも言えよう。

過去を書きかえることはできない。

けれど、いかようにも変えられる。過去に対する価値判断は。

だから、過去にとらわれ、振り回されているとすれば……。

過去そのものに、いちばんの原因があるのではない。

過去という事実に対する価値判断にこそ、問題の核心がある。

そして、過去に対する見方が一変すれば……。

オセロの黒が白に変わるように、不幸が幸福に劇変することさえ起こりうる。幸・不幸は、外的世界の事実ではなく、内的世界の想念（観念、価値観）にこそあるのだから。

そうならば、自分を苦しめていた暗黒（劣等感、挫折感、敗北感、失望感、後悔）は、波が引くように消えていくにちがいない。

それどころか、暗黒が光明に姿を一変することさえ起こりうる。

【自称「ポンコツ夫婦」の露命の夕映え】

道子は、18歳のとき家族性経性両下肢麻痺を発症。医師からは、いずれ歩けなくなるとの診断がくだされていた。

それでも彼女は、「自分の人生は自分で切り開きたい」⁽⁰¹⁾と考へ、21歳で親元を離れ、ベビーシッターの仕事につき、自活を始める。

ところが、28歳（※1977年）のときのこと。高熱をだし、麻痺が下肢全体に広がり、ついに立つことさえできなくなってしまう。

働くことができなくなり、家賃を滞納。家から追いだされ、路上で生き倒れ寸前となる。

そこを偶然、親切な人が通りかかり、九死に一生を得た。

道子は、どん底の体験によって、もう一度生きてみようと思ふ立つ。

当時の心境を、彼女はこうふり返っている。

「二十八歳の秋のことだったが、立てなくなった日に、私は水が飲みたいと台所へ這って行き、水道の蛇口到手

を伸ばした。手が届かない！その時のショックは想像をはる遥かに越えていた。こんなにも早く歩けなくなるとは思ってもいなかった……と、二週間あまりの間、目を覚ますと泣き、泣いては泣き疲れて眠る、そんな日々を過ごしていた。

やがて、昨日出来たことが今日出来なくなると嘆いていても、そこからは何も始まらない、それよりも、まだ自分に残されているものを考えてみよう、と思うようになった。それから私の人生は大きく変わった⁽⁰²⁾

「今まで出来ていたことが当たり前のことではなく、恵みであったことに初めて気づくことが出来た」⁽⁰²⁾

「人は障害のあるなしにかかわらず、老いていく中で、若い時に出来ていたことが出来なくなったりする。たまたま…ほんの少し早く、その時が来ただけなのかもしれない。そう考えることで私は救われた」⁽⁰²⁾

「窮鼠猫を囓む」という言葉があるが、人間もギリギリまで追いつめられると、迷いや甘さがふっ切れて、覚悟が極まることがある。

暗闇のなかで一条の光を見いだした道子は、心機一転、社会復帰を目的とした訓練施設にはいる。

そこで、夫となる細井宏之と出会い、翌年（※1980年）、結婚。

このときすでに宏之は、交通事故により、両手が不自由だった。しかも、道子は身体を動かすことで、いつ大動脈瘤が破裂してもおかしくない状態だったのである。

それでも道子は、命を懸けて、家事や衣服の着脱、入浴介助といった身の回りのお世話にいそしんだ。

「自分を必要としてくれる人がいる」⁽⁰¹⁾

こう思うたび、彼女は幸せがこみあげてきた。

けれども、平穏な日々は長くつづかない。道子は脳梗塞をおこし、左手が麻痺してしまう。

そのうえ夫の宏之は、持病が悪化し、麻痺が全身におよんだ。

こうして、自由に動かすことができるのは、二人あわせても、道子の右手一本だけとなってしまった。

ある日のこと。夫は妻を気遣い、やさしくこう語りかけた。

「今日は道子が疲れているようだから、買い物に行ってきたてやろうか」⁽⁰¹⁾

もっと厳しい境遇にありながら、それでも自分をいたわってくれる夫。

道子は、その深い愛情に感激し、幸せを強く噛みしめ

るのだった。

しばらくして、電動車椅子で新鮮なアジを買ってきてくれた夫は、「道子は片手しか動かせないのだから、煮るか焼くかしていいよ」と、いたわりの言葉をかけてくれる。

そのとき彼女は、天啓を受けたように、とても大切なことに気づいた。

「自分はここが不自由だから、あれはできない、これもできない」⁽⁰¹⁾

やりもしないで、そう決めつけていた自分の愚かさに。道子は、夫の深い愛情に報いるためにも、三匹の魚をすべて三枚におろそうと心に決め、二時間かけてやりとげた。

このとき細井夫婦は、固く誓いあう。

「私達はこれからもさまざまなことで自由を失うかもしれないけれども、どこかが不自由になっても、あれはできない、これはできないと思ひ込むのだけはやめよう」⁽⁰¹⁾

のちに、夫は呼吸困難となり、慌ただしく救急車で運ばれ、ICU（※集中治療室）で懸命の処置がとられる。

一進一退をくり返すも、3週間後、ようやく一般病棟に移ることができた。

しかし、ホッとしたのもつかの間。夫は、もっとも残酷な病である筋萎縮性側索硬化症（ALS）を発症しており、やがて全身の運動神経が冒され、死にいたると医師から宣告された。

道子は、車いすに座っていなければ、その場にへたりこんでいただろう。

「車椅子者であることを幸いに感じた」⁽⁰²⁾

それから夫の病室の前までもどるも、どうしても中にはいることができない。

急に涙があふれ、人影の少ないところはないかと、車いすを走らせる。

薄明りの待合室に飛びこむと、「堪えていた嗚咽が体の底から溢れるばかりだった」⁽⁰²⁾。

どれだけの時間が過ぎただろう？

「夫をいつまでもひとりにして置くことは出来ない」⁽⁰²⁾

それに、泣いてばかりいては、「二人の大切な時間が過ぎてしまう」⁽⁰²⁾。

まず、「夫の病を受容し」、自分自身を奮い立たせよ

う」⁽⁰²⁾。

ふいに夫の笑顔が脳裏に浮かんだ。

「あとどのくらいその笑顔が見られるのか」⁽⁰²⁾

そう思ったとたん、「またも大声を上げて泣きたくなくなってしまった」⁽⁰²⁾。

けれど、帰りを待ちわびる夫のために、「涙をぬぐい、顔を洗って病室に戻ろう」⁽⁰²⁾

そう心を定めたのである。

——道子は、雨の日も雪の日も、車いすで病院に通いつめ、付添看病をつづけた。

だれかのお役に立てること。そのことに、彼女は大きな生きがいと幸せを感じるのであった。

しかし、道子の献身的看病にもかかわらず、夫の病状は悪化の一途をたどっていく。

しかも、医師からは、意識を取り去り呼吸器をつけるか、退院し、24時間、人の手で呼吸介助するかを選択を迫られてしまう。*

※呼吸介助を選択するなら、退院してもらいたいと医者が言った理由とは？

「一日に何人もの人が病室に出入りされたのでは、他の患者さんの迷惑になるから」⁽⁰²⁾ というものだった。

なお、呼吸器をつけるさい、意識を無くするのは、苦しい思いをさせてしまうからだという。

夫の宏之はつぶやいた。

「今まで皆が胸押しをしてくれて、大変なことはわかっているからもう寝かせていいよ」⁽⁰²⁾

道子は「思わず涙が溢れて、自分をどうすることも出来なかった」⁽⁰²⁾。

そのとき、病室に重苦しい空気が流れる。

が、介助者のひとりが言葉を発した。

「今までやってきたのだから、自分たちで最後までやろう」⁽⁰²⁾

すると、「私にもやらせてくれ」⁽⁰²⁾ という声が、つぎつぎとつづく。

宏之は、「皆の気持ちは何よりも嬉しく」て、「ポロポロと涙を流」⁽⁰²⁾ つづけるのであった。

さっそく、つぎの日に退院したところ、介護者たちがその日の夜に電話連絡してくれた。おかげで、翌日の早朝から、足の踏み場もないほど多くの人たちが訪れて、ローテーション表に名前を書きこんでくれたのだった。

それでも、胸押しは、長くても一人30分が限界である。

そのうえ、リレーがうまくいかず、次の人が来ないために前の人が帰らないことも、ままあった。

「このままではいけない！」⁽⁰²⁾

道子は強い危機感を感じていた。

そしたらなんと彼女は、座布団やタイル、ゴムといったありあわせの材料で、テコの原理を用いた胸押し機を発明してしまったのである。

お蔭で、今までの半分の力で楽に押せるようになり、道子自身も加わることができるようになった。

すると、どうだろう。

情は人の為ならず（※他人に情けをかけると、めぐりめぐって自分により報いが来る）。なんと、脳梗塞のために不自由になっていた左手が、もとのように動くようになったのである。

——ある晩、道子は、介護者から、様子がおかしいからすぐきてほしいといわれ、すぐさま駆けつけた。

すると、夫の呼吸が乱れているではないか！

すぐさま救急車を手配し、救急病室に入院。医師の判断で、呼吸器を装着する。

診断は、発病したら助からないといわれていた肺炎だった。

夫は苦しくて顔をゆがめ、胸押しに変えてほしいとか、呼吸器の呼吸回数や酸素量を増やしてほしいとか、しきりに助けを求めてくる。彼自身は、苦しみの原因が、肺炎にではなく、呼吸器にあると思こんでいたのだから。

けれど、道子には、本当の理由が言えるはずもない。とりもなおさず、死の宣告になってしまうからである。

病室の廊下にたたずみながら、道子は自問自答をくり返す。そして、すさまじい葛藤との格闘のすえに出した答えはこうだった。

「私たち人間は苦しみの中に在る時、その苦しみは何からくるものかを知り、そのことを解決して苦しみから解放されることを願う。けれどその正体がはっきりわからない時、あせり、もがく。私がおもひの立場でいたら、本当のことを教えてほしい……という気がしてきた」⁽⁰²⁾

翌日、道子は意を決し、夫に真実を告げた。

すると、不当な苦しみを強いられていると思っていた夫は、落ち着きをとりもどし、こうつぶやいたのである。

「そうだったのか。どおりで苦しいと思った。もう一度ガンバッテみるから、側にいてくれ」⁽⁰²⁾

それ以来、夫は苦しいとひと言もいわなくなった。

しかも驚くべきことに、二週間後には肺炎が完治したのである。

たしかに、車いすの道子にとって、病院での付添いは容易いことではない。

しかしそこには、それをはるかにしのぐ確かな幸せがある。

彼女は、しみじみ思う。

「夫が眠りにつくを見ながら、自然に私の頬はゆるみ、私は喜びに満たされていった。これほどまでに、夫に必要とされる妻があるだろうか、と」⁽⁰²⁾

細井夫妻は、一日も早い退院を強く望んでいた。

残された時間を二人で過ごし、あの日の誓いどおり、「今やれる可能性のあるものをやりたい」⁽⁰¹⁾と、切に望んだからである。

ところが、入院から二か月が過ぎようとしていたときのこと。

医師からは、呼吸器を着けたままでの退院は難しいと伝えられた。

それならと、夫は、自発呼吸の練習に励み、妻は呼吸器の購入と往診可能な医師を探し求め、かけずりまわる。

病院からの妨害や脅しはあったものの、彼らはこれに屈することなく、自己退院の決定を病院側に伝え、病院を後にした。

退院後（1984年9月）、細井夫妻は車で横浜を立ち、道子の実家がある長崎県島原市を訪れる。「人生という限られた時を数分も無駄にしたいくないという思い」⁽⁰²⁾を胸に刻みながら。

到着を心待ちにしていた父は、元気そうな娘夫婦の姿を見て、とても喜んだ。

1年後には、北海道を目指し、車で旅に出る。

その動向は各地で大きな波紋を呼び起こす。

また、同行した映画のロケ班によるドキュメンタリー（『ふれ愛の旅』）は、全国各地で上映され、深い感動をもたらしたのである。

そればかりではない。

彼らの驚くべき行動は、当時の常識を覆し、患者が病院から外にでる口火を切ったのだった。

「最後の最後まで私達夫婦は生きたのだ」⁽⁰¹⁾

二人いっしょの幸せな時を過ごし、生きた証をたしかに残し、夫は最期をとげた（※1986年11月20日）。

細井道子には、どうしても伝えたいメッセージがある。

「どんな状況になっても、決してあきらめないこと」⁽⁰¹⁾

「どんな人でも、どこかの誰かが自分を必要としている。私のような何一つ誇るようなものがないものでも、亡き夫は必要としてくれたし、夫のように指一本、声一つ自由にならなかった人が私を支えてくれたのですから」⁽⁰¹⁾

【破壊から創造へ】

漆を使ってこわれたものを修理し、金で装飾する。そうすることで、割れ欠けした傷を新たな魅力（美しい景色）に変え、未来へと継いでいく。これが金継ぎと呼ばれる技法である。

しかし、京都の漆芸修復師・清川廣樹によれば、金継ぎは、物の修理にとどまるものではない。

物をこわしたことによる「他人のこわれた部分。精神性もふくめて…修復」⁽⁰³⁾をすることになる。

しかも、そのことをとおして、「自分自身のこわれた部分もいっしょに修復ができていくような気持ち」⁽⁰³⁾になるのだという。

「こわれる」ことの意味と価値について、清川廣樹は語る。

「物というものは、形になった時点で、こわれることは宿命として生まれてきます。

こわれることは、…けっして悪いことではないと思います。

私たち自身も、こわれたり、欠けたり、それは日常のようにやってくることなんです。

それをけっして隠さない。

不完全であるからこそ、新しいものが生まれる」⁽⁰³⁾

「自分の歴史を隠さない。

たとえそれが、大きなアクシデントであっても、…受けとめなければならない。

…そのアクシデントがあったから、新しい自分が生まれる」⁽⁰³⁾

【固い価値観と柔らかい価値観】

永続的幸福にいたるためには、ゆるぎなく、びくともしない価値観を構築することが不可欠である。

だが、これだけでは十分ではない。

進化論の適者生存が明示するように、状況（社会、境遇、環境など）の変化に適応できるよう、価値観を柔軟に調整したり、深化させたりしていくことも必要である。いわんや、変化が目まぐるしい現代社会においてをや。

つまり、変化しない価値観と変化する価値観を同時に
もつことが欠かせない。

たとえば、もし、あなたが、今でも記憶からぬぐい去
れぬ悔恨に困苦しているならば……。

前向きな解決法は一つしかない。

過去の価値観を手放して、今の状況にぴったり合った
価値観につくり変えたり、深化させたりしていくことで
ある。

ひとたび、価値観が変改すれば、自分を悩ませていた
出来事や劣等感、挫折感、失望感、後悔といったものが
瞬時に消え失せるかもしれない。

それどころか、幸福の種にさえ一変しうるだろう。

このように、価値観には、人生を激変させる奇跡的な
パワーがある。

失われた時間についてもしかり。

私たちは、過去を取りもどすことはできない。

けれど、過去に対する気づきを契機とし、今と未来を
変えていくことはできる。

かてて加えて、失われた時間に対する喪失感(焦燥感)
を、時間に対する尊重(時間を大切にすること意識)へと転換
し、失われた時間を補てんすることもできよう。

いや、それどころか、今と未来の時間に、失われた価
値を補ってありあまる価値を与えることさえできる。

虚空の闇に囚われていてはいけない。
闇黒の牢獄を超克し、天空のきらめきをこそ見つけ
て生きよう。

「二人の囚人が鉄格子から外を眺めたとき。一人は泥
を見た。一人は星を見た」

(フレデリック・ラングブリッジ)⁽⁰⁴⁾

「A 弦が切れたら残りの三本の弦で演奏する、これが
人生である」

(ハリー・エマソン・フォスディック)⁽⁰⁴⁾

引用文献

- (01) 小林司. (1989.8). 「生きがい」とは何か 自己実
現へのみち. 日本放送出版会.
- (02) 細井道子. (1992.1.20). ポンコツ夫婦の活動記.
中央出版社.
- (03) 清川廣樹. The Japanese art of fixing broken
pottery-BBC REEL. (2020.8.5). YouTube.
(https://www.youtube.com/watch?v=r9LMKGe0UU&feature=emb_title). (2020.12.12 取得).
- (04) Dorothy Carnegie/神島康 訳. (1986.10).
カーネギー名言集. 創元社.

Living between life and death ~Choice of Mr. and Mrs. Hosoi~

ENDOHI Hitoshi

Abstract

Through the way of life of the Hosoi couple who fell into an extreme situation due to a serious illness, we look at the wonderful value and potential of human beings who blossomed in the last-minute circumstances.

And if we are faced with such a situation, we will seek out how to deal with and break through the marginal situation from the viewpoint of value perspective.